

Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名: 国際収支(2006年7月)

発表日2006年9月13日(水)

～経常黒字額は2ヵ月ぶりの増加～

第一生命経済研究所 経済調査部

担当 副主任エコノミスト 長谷山 則昭

T E L : 03-5221-4525

		原数値 経常収支				季調値 経常収支			
		貿易・サービス収支		所得収支		貿易・サービス収支		所得収支	
				貿易収支				貿易収支	
		前年比		前年比	前年比	前年比	前期比	前期比	前期比
05	1-3月期	▲ 8.1	▲ 23.0	▲ 21.4	14.5	0.0	4.9	2.8	▲ 1.6
	4-6月期	▲ 9.8	▲ 30.4	▲ 29.7	18.4	▲ 5.4	▲ 30.3	▲ 24.7	14.3
	7-9月期	▲ 1.5	▲ 35.2	▲ 31.7	28.5	4.4	▲ 2.8	▲ 6.1	4.9
	10-12月期	13.6	▲ 8.2	▲ 18.6	30.1	20.8	30.7	10.0	12.7
06	1-3月期	18.5	▲ 13.5	▲ 28.2	42.0	▲ 4.1	▲ 9.4	▲ 6.1	7.2
	4-6月期	▲ 4.4	▲ 28.0	▲ 18.8	15.7	▲ 16.8	▲ 32.4	▲ 13.2	▲ 7.7
05	7月	3.2	▲ 20.2	▲ 21.8	24.2	▲ 4.7	▲ 16.0	▲ 13.2	1.3
	8月	▲ 16.1	▲ 93.3	▲ 69.4	28.1	4.5	11.1	3.4	1.4
	9月	6.1	▲ 19.3	▲ 20.8	33.7	5.1	▲ 4.5	▲ 0.5	7.1
	10月	7.3	▲ 20.8	▲ 29.7	45.7	12.8	33.5	1.0	5.9
	11月	17.3	16.7	▲ 0.8	11.4	▲ 9.2	▲ 10.9	11.0	▲ 11.1
	12月	16.1	▲ 9.9	▲ 16.8	39.6	27.6	16.4	2.1	29.1
06	1月	2.5	赤字	赤字	33.7	▲ 18.5	▲ 13.9	▲ 20.8	▲ 10.6
	2月	10.8	▲ 7.0	▲ 11.8	32.9	6.6	8.3	28.8	3.6
	3月	34.3	6.7	▲ 6.8	58.0	▲ 1.7	▲ 18.0	▲ 14.3	9.6
	4月	▲ 20.2	▲ 65.0	▲ 33.9	12.8	▲ 34.0	▲ 75.9	▲ 37.6	▲ 15.3
	5月	15.8	25.2	7.0	15.7	39.1	427.4	87.6	▲ 10.8
	6月	▲ 7.2	▲ 14.4	▲ 12.7	23.2	▲ 2.4	▲ 41.3	▲ 25.4	29.4
	7月	7.1	▲ 8.4	▲ 8.5	23.5	11.1	57.5	26.5	▲ 8.5

(出所)財務省「国際収支状況」

○ 7月の経常黒字額は前年比+7.1%と増加

7月の経常黒字額は前年比+7.1%の18,096億円（原数値）と2ヵ月ぶりに前年を上回り、ほぼ事前の市場コンセンサス（17,691億円、レンジ16,411～19,700億円）通りの結果となった。内訳をみると、貿易黒字額が前年比▲8.5%となったが、サービス収支が同▲8.8%と赤字幅が縮小したこと、所得収支が同+23.5%と黒字幅が拡大したため経常黒字額は増加した。

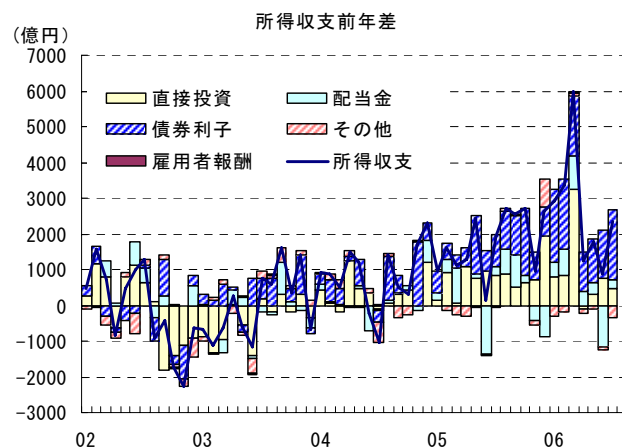
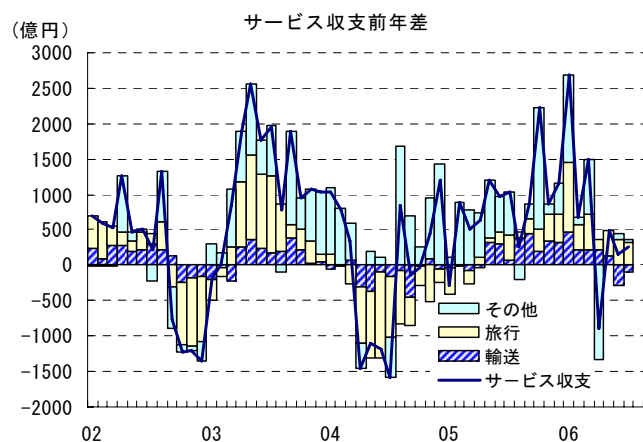
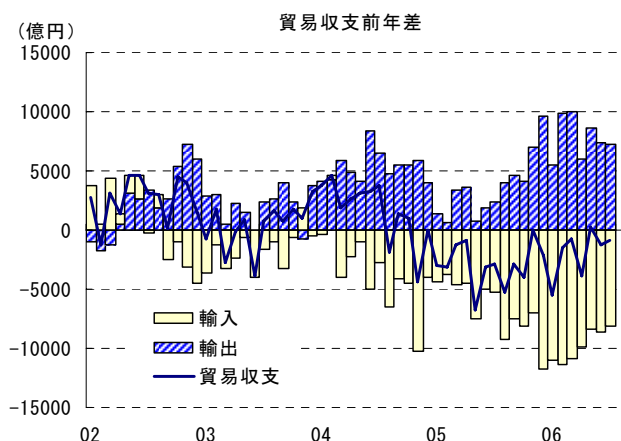
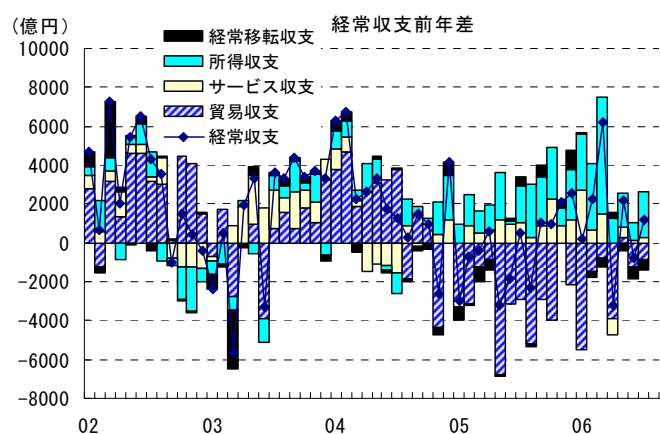
○ サービス収支の赤字額の縮小と所得収支の黒字額拡大が経常収支を押し上げ

貿易黒字額は、原油の増加の伸びが鈍化したことから輸入金額が前年比+19.0%（前月同+20.2%）と縮小したものの、輸出金額も前年比+13.6%（前月同+14.0%）と伸びが縮小したことから引き続き前年を下回った。輸出金額の鈍化については、自動車輸出が好調だったことから対米向けは堅調な推移となったが、EU向けやアジア向けの伸びの鈍化が影響した。

サービス収支については、輸送収支の赤字幅は拡大したが、旅行収支やその他サービス収支は赤字幅が縮小したため、3ヵ月連続で赤字幅が縮小した。輸送収支の赤字額が拡大したのは原燃料価格の高騰が続いて

いることが背景にある。例えば航空業界では、燃油価格の急激な高騰に対応するため、通常の運賃に付加する燃料サーチャージの制度がある。燃油価格の高騰が長く続いていることから、企業努力ではカバーしきれない部分の価格転嫁が一段と進んでいるため輸送支払いが増加し、輸送収支が悪化した。一方、旅行収支はビザの発給要件の緩和など、日本への外国人観光を推進していることもあって海外からの入国者数は増加傾向にある。このため旅行収支は赤字額の縮小傾向が続いている。

所得収支は、①証券投資収益が対外資産の累増を背景とした外国債券の受取利子の増大などによって増加基調を辿っていることに加え、②直接投資収益についても海外子会社の業績が好調であることを反映して堅調に推移しているため拡大傾向が続いている。今月もこういった状況には変わりがなく、所得収支の黒字額の増加が経常収支を押し上げた。



○先行きも経常収支は高水準での推移が続く

対外資産の増加などから所得収支の黒字額の拡大が続く可能性が高いこと、サービス収支も赤字額の縮小傾向が続くとみられる下、経常収支の先行きについては貿易収支の動向が重要となる。

輸出入別にみると、輸入金額上昇の主因となっている原油価格は、7月（輸入C I F 価格）に1 バレル 67.9ドルと過去最高水準を更新した。8月もさらに上昇する可能性が高いが、WT I がこのところ低下傾向を辿っていることから判断すれば原油輸入C I F 価格も早晚低下に転じることも考えられる。原油価格の動向については不透明な部分も大きいですが、今後は前年対比でみた輸入金額への押し上げ寄与は徐々に剥落していく公算が大きくなったと考えられる。一方、輸出金額についても伸びが鈍化してくる公算が大きい。輸出の牽引役である米国経済では減速感が鮮明になってきていることがその理由である。輸出に先行するO E C

D景気先行指数がピークアウトしてきていることなども踏まえると輸出を取り巻く環境はやや悪化してきていると判断される。もっとも、米国経済の減速は小幅にとどまる見込みであり、輸出が大幅に落ち込むことは回避できよう。貿易収支に関しては、米国経済の減速ペースおよび原油価格の動向に左右されやすい展開が見込まれるが、目先は一進一退の状況となろう。経常収支全体では、貿易収支については一進一退の動きが見込まれるが、所得収支の黒字拡大とサービス収支の赤字縮小が下支えする形で高水準での推移が続くとみられる。

